Kino Press is a newsletter published by Kyoto Seika University and distributed to students, faculty, administrators, graduates and other members of the university community.

1994年10月15日
京都精華大学発行

KINO PRESS
木野通信
KYOTO SEIKA UNIVERSITY
第22号

This publication is intended to keep readers informed of all aspects of K.S.U.'s development, including on campus event, personnel changes, student news, and perspectives on campus life.

京都精華大学　庶務課
京都市左京区岩倉木野町137
TEL (075) 702-5200

女性卒業生の就職について

学長　柴谷篤弘

この一、二年、女性の短期大学をふくむ大学進学が進学年齢人口の四〇%をこえて、まだ三〇%台にとどまっている男性をうわまわるようになった。彼女たちをうけいれる大学の側にとっても、最近の女子学生の活躍には目をみはるものがある。わが京都精華大学の状況でいうと、たとえば一般入試の段階では、志願者の男女比率はほぼ三対一だが、入学の段階ではこれがほぼ一対一になる。つまり女性志願者のほうが、入学試験の成績がずっとよいのである。そして卒業の段階になると、毎年代表になって卒業証書を受領したり、卒業生答辞を読んだりする役にえらばれるのは、二つの学部ともおおくは女性であるし、今年は学生自治会委員長にも女性がえらばれた。これは女性が成績はともかく、社会的にすぐれていることを示す。このような傾向はなにも本学にかぎられたことではなく、成績評価についても国公私立のおおくの大学でほぼ共通してみられる現象である、といわれる。

こうして現在各大学で、女性の活躍はたしかに量でも質でも男性をしのぐ勢いをしめしている。ところが今日の不況のもとでは、就職の段階になると、この傾向が一挙に逆転して、女性はいちじるしく苦戦をしいられている。女性にとってはまことに不公平で、社会におけるあからさまな女性差別である、とうけとられよう。しかし彼女らはいまあきらかに弱者の立場にあるから、この事態にたいして、正面切った批判・告発・糾弾のこえをあげてはいない。しかしこれを社会の立場から見ると、日本はいまあきらかに人材と教育のための公共投資を浪費していることになる。現在日本の企業は構造的な不況をのりこえて生き残るために、体質改善にむけて種々の努力をつくしているのに、ながい目でみれば、ここであきらかに将来にむかって損失になるようなことをしているのではなかろうか。もちろん企業内での女性と男性の雇用者についての将来の見通しは、すくなくともある程度は過去の実績と経験にもとづくしかないであろう。だが戦後から八〇年代の終りまで日本の企業に定着してきた慣行（例えば、終身雇用と年功序列制、年度はじめの一括採用、中間管理職要員の確保、国内雇用など）が、現在根本からみなおされる段階に来たというのが、日本の企業がいま直面している問題であるようだ。

しかしもしこれらの「常識」がすべてくつがえってゆく時代にわれわれが突入しつつあるのならば、現在なされている人材と教育費の浪費については、大学のがわからも社会にたいして警告を発するべき時期にきているのではないだろうか。さらに問題をもっと広く深く、女性の社会的な活動と、その人類文明的な意味にわたってかんがえると、現在の資本主義的な生産活動のなかでの労働の意味や、人間の経済活動が環境におよぼす影響を含めて、世界はいやおうなしの大転換と著しい政治的な不安定に直面している、とおもわれる。そしてそのなかでの女性の活動の意味がいまあらためてみなおされる時期にきているらしい。

本学開学二五周年の記念講演会ではウォーラーステインの世界システム理論に関連した主題がとりあげられたが、女性の立場からする批判はこのとき十分に展開できなかった。さる四月にヨーロッパ大陸の女性学者三人をまじえての討論会（東京）では、この問題がほりさげられて、今後の産業労働形態が、職場でも個人でも「自給経済」の方向にむけて変化してゆかざるをえないことが論じられた（『情況』七月号）。つまりこれまでの主婦の家庭内「ただ働き」の様相が、企業労働全般にむかってひろがる、という見通しになるので、従来の女性からする社会経済批判は今後かたちをかえるのかもしれないという。もっと現状にひきつけていえば、均等法の導入にたいする企業の反応としての女性総合職と一般職の区分は、今日女性の労働現場における定着率の上昇からみて、おそらく適切ではなかった、ということが、企業のなかでも実感されつつあるらしい（上野千鶴子氏の教示による）。このような情況のもと、女性の就職率の低下がつづくなかで、いろいろの困難はあろうが、女性自身の活動と、大学側からする、社会経済政治批判（大学本来の「知」の任務と責任）とが力をあわせて、きびしい世界の現実によりよく適した変革を主体的・実践的に導き出す努力をいまこそなすべきである、という意識の確立が、いまわれわれにもとめられている、と私はおもう。

京都精華大学 1995 年度入試日程

人文学部

①募集定員……人文学部　人文学科 300名

②入試日程・試験会場・試験科目

	出願期間	試験日	合格発表	手続締切	試験会場	試験科目
公募推薦入試	10月28日(金)〜11月10日(木)	11月20日(日)	11月26日	12月5日	本学及び関西文理学院	英語、小論文から1科目選択
一般一次入試	1月17日(火)〜1月31日(火)	2月11日(土)	2月18日	2月28日	本学及び関西文理学院	英語、国語、選択科目（日本史・世界史・小論文から1科目選択）
一般二次(地方)入試	2月13日(月)〜2月28日(火)	3月6日(月)	3月11日	3月22日	東京 金沢 名古屋 広島	英語、国語、選択科目（日本史・世界史・小論文から1科目選択）

③推薦入試受験資格……評定平均値・卒業年度は問わない。他大学との併願可。

美術学部

①募集定員……美術学部　造形学科 150名　デザイン学科 150名

②入試日程・試験会場・試験科目

	出願期間	試験日	合格発表	手続締切	会場	試験科目
公募推薦入試	11月4日(金)〜11月22日(火)	12月7日(水)<洋画・陶芸・マンガ>12月8日(木)<立体造形・VCD>12月9日(金)<日本画・建築・版画・TD>	12月17日	12月29日	本学	実技A（鉛筆デッサン）実技B（専攻分野実技）
一般入試	1月18日(水)〜2月3日(金)	2月15日(水)・16日(木)<洋画・陶芸・マンガ>2月17日(金)	2月25日	3月6日	本学	英語 文章の理解 実技A 実技B

③推薦入試受験資格……評定平均値・卒業年度は問わない。他大学との併願可。

1994年度人文学部

秋期卒業式 入学式挙行

9月15日（祝日）卒業式が本館3階にて行われ、人文学部の留学生秋期卒業生3名が巣立って行きました。人文学科を優秀な成績でおえた李・林・孫の3君はご家族、教職員、在学生の祝福を受けましたが、「卒業生の言葉」で、李君は

「足を怪我した入学時は何と階段と坂の多い学校かと思い、4年前には、この坂の上にはいったい何があるのだろうと思ったが、坂の上には一杯宝物があった、学科の勉強だけでなく人間として成長した場であった」

と語りましたが、大学としても留学生の皆さんから学ぶことが多かった四年間でした。

入学式では新留学生4名が、

「あいまい、もやもやという感じがあるかもしれない日本の大学・学生のあいだに新鮮な息ぶきを吹き込んで下さい」という人文学部長の激励のあいさつを受けました。

秋期人文学部卒業式　ほたるの光合唱

京都精華大前駅袴線橋が京都市都市景観賞を受賞

本年3月、叡山電鉄京都精華大前駅袴線橋の設計に対して、第三回京都市都市景観賞を受賞した。

この栄は袴線橋の設計、施工に対して物心両面にわたってご援助いただいた京都精華大学を始め関係者の方々皆のものである。

ところで、穏やかな太鼓橋状のカーブをもつこの袴線橋のデザインはその見馴れぬ形のトラスとともに、見る人に、おや、とおもわせる不思議さがあることだろう。

ここに穏やかな太鼓橋としたのは、これからさきは京都精華大学というひとつの知的世界であるということの結界としたい、という意図によるものである。いうまでもなく太鼓橋は、社寺の例をもちだすまでもなくしばしば、聖俗二つの結界として登場する。

また、円環状のトラスは、十六世紀のイタリアの建築家のアンドレア・パラディオの書き残したスケッチによっている。パラディオは、トラス構造の発明者であるが、彼の書き残したトラス構造のもっとも始源的な形をここに再現した。何ごとにおいても、そのもっとも原初的な形は素朴さのなかにも一種の崇高さをもつ。日々、学の最先端にいそしむ学徒の方々に、こういう世界にこういう原点があったのか、と認識していただきたい、という気持ちからこういう形を思い付きパラディオ橋と命名していただいた。

さいごに、これはわたしの勝手な解釈だが、岩国の錦帯橋の故事にならって、この橋を京都精華大学の「校門」と考えた。錦帯橋は元和の一国一城令によって壊された小早川隆景の城の材料をもってつくられたものであり、それは事実上の小早川の「城」であった。京都精華大学もその自由な校風から、校門をもっていないことを誇りにしているが、門という権威主義的なものによらない門があってもいいのではないか、とかんがえたのである。線路に対して跨線橋全体が門の形になっているし、また通路に対してパラディオのトランスをとりつけたのも、構造上の安定のみならず、意匠上の門をめざしたものであった。

この「門」に立って朝夕々、洛北の山を仰ぎ、あるいは山を背負って通った日のあったことを記憶していてほしい、という希いを込めて、設計したものであった。

（美術学部教授　上田　篤）

「京都精華大前」駅袴線橋

フィールドワーク 夏期ショートプログラム（ロンドン）の成果

七月二九日より八月二八日までの一ケ月間、イースト・ロンドン大学（UEL）での人文学部フィールドワーク・ショートプログラムとして、英語の語学短期集中研修が実施された。参加者は学生九名、教員二名（藤枝、小野）の計十一名で、小野も研修に学生として参加した。

本学としても、またUELにとっても初めての試みであったが、UEL側の想像以上の協力と到れり尽くせりの配慮を頂いて、非常に成功裡に終えることができた。UELでは語学センターのセンター長ジョン・フォーゲルマン教授およびジョン・シンプソン上級講師、国際課のグラハム・パリー課長らが全体プログラムの計画・運営に当たられた。その他、数多くの方々にお世話になったが、海外経験の長い藤枝先生も驚かれる程、親切で細やかなご配慮を頂いた。

ロンドンも十七世紀以来という記録的な暑さで、八月前半は日中は汗ばむ程だったが、半ば頃から涼しくなり、以降は猛暑の日本に引き比べ申し訳ないような快適なイギリスの夏を心ゆくまでエンジョイできた。

大学から車で十五分程のロムフォードYMCAを宿舎としたが、ここには数多くの国々からの学生や青年たちが集まっており、学生諸君も至って濃密な国際交流の実をあげることができたのは幸だったと言えよう。

最後の日の朝宿舎YMCA前でUELより頂いた修了証と記念品を手に

大学では一週間のうち半日授業が二日、全日授業が二日間行なわれたが、当初、英人教師の英語での授業にドギマギしていた学生諸君も、二週間も経つうちに次第に慣れ、終り頃にはジョークも飛び出す程の楽しい授業となった。

これも、外国人向けによく工夫され、こちらがよく理解できるようにゆっくりと話しかけながら、学生たちの積極的なパフォーマンスを引き出すように根気よく接してくれた、ダーモットとマルタ両先生のご指導のおかげである。

また、エクスカーションで訪れたロンドン市内の美術館・博物館・教会、演劇やミュージカルの観賞、新生ロンドンを象徴するドックランドの見学、ケンブリッジ、ストラットフォード・アポン・エイヴォン、ブライトン、カンタベリー、ラヴェナム等への日帰り旅行、そしてライとバトルへの一泊旅行も忘れられない。

ロンドンの街並みや無数に散在する広大な公園、世界中から集まって来た様々な人種から成る人々の暮らしぶり等をつぶさに見て、大英帝国の奥深い伝統と現代ロンドンの苦悩の一端を垣間見た思いであったが、イングランド各地とりわけ通常では困難なライやラヴェナム等の田舎・農村への旅行は、衰えたりとは言えないイギリスの人々の生活のゆとりぶりと民度の高さを改めて思い知らせてくれたことであった。

エクスカーションでは、マギーとジョン（S）の二人が信じられない程に綿密な準備と解説・案内をしてくれ、我々はただひたすら恐縮するばかりであった。

またプログラムの変更や旅行等でのこちらの要望にも、いやな顔ひとつせずに応じてくれたイギリス側のご厚意、一ケ月間にわたる集団生活を楽しく盛り上げてくれた学生諸君のパラエティ豊かなパフォーマンス、そしてこの研修の企画から始まって帰国するまでの間、学生たちを心身共に支え、さまざまな交渉や討議を通じてすべてを成功へと導いて下さった藤枝先生、すべての人々に深い感謝の言葉を捧げたい。

なお、UELの他国学生向けのプログラムとの合同研修や合同エクスカーション等が実現すれば、語学研修のスピードアップや地球人としての開かれた交流意識の形成にも大きな成果をあげることができるのではないかと思われる。その他、来年度の研修をいっそう実のあるものにするために、学生諸君の意見も取り入れて、さらに効果的な方法を考えていきたいものである。

（人文学部教員　小野　瞭）

グループリーダーズ・キャンプ'94を終えて

（学生自治会　会長　小野佳子）

8月1日から2日にかけて朽木学舎でリーダーズキャンプが行われた。このキャンプを主催したのは柴谷学長と学生自治会長の私である。他大学にはない学生参加に精華の特徴がある。それぞれのグループ、立場の違う人間が同時に集まり、話し合える場としては大変貴重なキャンプであると思う。反省点を述べると、一人一人がリーダーだ、という自覚のないまま参加した人が多かったように思える。自治会執行部も準備不足が目立った。このキャンプは、これからの大学全体のことを考えるのによい機会であったと思う。

柴谷学長の『自由自治』の解釈について』の講演を聞いて、要は話し合うことが大切なのではないか、と思った。「全ての個人に同じように自由があり、互いに相手の立場を尊重し自分で責任をもつ、それが自治につながる」と私自身は解釈している。「自分で責任をもつ」のはむずかしい。

大学側から「第二期計画」の説明をきいた。20名、30名も入らない小さなクラブボックスを与えられることになる。なぜそうかは、さておき、不便・困難を乗り越える工夫が必要となった。

斉藤先生の「学生生活とエイズ」の講演にはびっくりした。斉藤先生は、エイズの知識を与えるだけでなく、コンドームを学生一人一人に配られた。エイズが少し身近になった。

学友会クラブ紹介では、それぞれのクラブの悩みなどがきけたと思う。何をすべきかみんなで考えていく必要を感じた。

自治会執行部の話は説明不足でわかりづらかったと思うが、それはこれから。参加した皆様、お疲れ様！

『交換留学生として キャンベラへ』

版画分野大学院93MH2　富永由美子

オーストラリアと聞いてイメージするのは何でしょうか。地球のへそ、エアーズロック、グレードバリアリーフ等、大自然だろう。そんな中で首都キャンベラは人工的な計画都市です。国会議事堂が街の中心にあり、南に川を塞き止めて作られた湖の辺りに、国立図書館、美術館、科学館などが建ち並んでいます。昨年9月～今年3月末まで、キャンベラ美術大学で交換留学生として学びました。

美術大学は、オーストラリア国立大学の一部で、版画、ペインティング、テキスタイル、陶芸、写真、ゴールド&シルバー、木工、ガラス、グラフィックスの分野があります。各学年10人弱ぐらいです。入学試験は、面接と、今までに制作した作品によって審査されます。年令はばらばらで、結婚して子供のいる人も多く、先生の方が若いということもめずらしくありません。学部生の実習は朝9時から5時頃までです。その後は工房が使用出来ません。5時以降は出入口のドアがロックされるので帰らねばならないのです。研究生、大学院生は各人ロックを解除するカードが渡されていて、24時間、土日も出入りすることが出来ます。8時には、使用している所以外すべてのライトが消されていきます。誰もいないし暗いし、とても不気味です。帰る時はライトを消さなければならないので、真っ暗です。ある時、暗闇の階段の所で、上から下りてきた人とぶつかり、"ギャーびっくりした"と思わず日本語で叫んでいました。

11月に卒業制作展が行われました。版画では1室に一人ずつ、一年間に制作した作品を展示し、他分野の先生、論理の先生を交えた審査が行われました。他分野でも一年間の作品が一週間程展示された後、2、3点を選び、学内にある二カ所のギャラリーで卒業制作展が行われました。オープニングパーティーでは招待された人達も多く華かな中、賞が次々と発表されました。作品には値段がつけられていて個人や、ギャラリーが買っていきます。これにはとても驚きました。研究生も同様に3月に卒業審査・制作展が行われ、同時期に私も学内のスペースで半年間の制作を展示しました。展示を手伝ってくれた学生達は、隣りにくる絵の色も大事だけれど、それ以上に、隣り合う絵と絵とのつながりや、流れの方を我々は重要視するんだと語ってくれました。

オーストラリアでの生活は、自分の内面をみつめ、対話し、行動を起こせば何でもやりたいことができる貴重な体験でした。

「CANBERRA SCHOOL OF ART卒業制作展風景」

THE AUSTRALIAN NATIONAL UNIVERSITY
CANBERRA SCHOOL OF ART

就職課 NOW

ここ20年間で最低という雇用状況の中、4年生の就職希望者の内、半数以上がまだ就職活動を継続しています。

まず最初に、連日の猛暑とも重なり、大変厳しい夏を過ごすことになった4年生の皆さんを激励したいと思います。中堅企業の求人は、まだこれからの所も多いので、ねばり強く頑張って活動して下さい。

又、3年生向けの就職ガイダンスを、10月から頻繁に実施します。業界や業種に関する勉強会や、具体的な就職活動についてのアドバイス等を中心に、より充実した情報提供ができるよう計画中です。3年生の皆さんはぜひ参加して下さい。

最後になりましたが、卒業生の皆さんへ。現在お勤めの仕事内容のアンケート調査をさせていただく予定があります。在校生の就職活動の良き指針や励ましになると思いますので、その際はご協力をお願いいたします。又、求人に関するご依頼・ご質問等がございましたら、お気軽に就職課までご連絡下さい。

拓本を収集

資料収集委員会

美術・人文両学部の教育・研究に有益な資料を選ぶことは、なかなか難しい仕事です。当委員会では、従来の収蔵品を検討した結果、印刷物（版画・ポスター）の比重が高いところから、その特徴を生かし、発展させようと昨年度拓本の収集を始めました。

拓本は、もともと写真の無い時代のコピー技術として生まれたものでしょうが、原物の姿をそのまま写す資料的価値の上に、墨と紙の画面がかもし出す美的価値が重なって、次第に一個の芸術としても、扱われるようになってきたものです。

拓本の主な対象として、碑文と画像石があります。東アジアでは、「書」は常に芸術の首位にありました。書体のデザイン、筆触やストロークの運動感、にじみやかすれの偶然性といった視覚的な面と、文字・文章が示す意味や概念、音韻等が混然一体となったおもしろさが「書」にはあります。各時代の碑文には、「書」として「文」として当時の文化の枠が認められるといってよいでしょう。また画像石は、古代の墓室等に刻まれた絵画ですが、ここには当時の人々の信仰や想像力が率直に表されており、民俗・宗教的資料としても大変興味深いものです。そして拓本によれば、これらを実物大で見ることができるのです。

近年、中国から従来知られなかった新しい資料が、拓本として続々と紹介されるようになりました。本学では新資料を軸に、他にはない特色ある収集を目指したいと思います。

市民の方も参加
「古文書入門講座」

橋本 初子

平常の授業では、日本史の概論的なことしかできませんが、授業中に紹介する史料について、更に詳しく勉強したいという学生の希望によって、平成六年五月から開始しました。毎月、第三土曜日の午後一時三〇分から三時まで、流渓館の演習室が、この講座の教室です。

洛北の山ふところに抱かれた学舎で、古文書の勉強会をすることも一興かと思い、私が京都市の市民講座やアスニー（生涯教育講座）の講師に出ましたところから、市民の方々を誘いました。「大学の教室で学生と共に、古文書の勉強をしませんか」という呼びかけに応じて下さった市民の方が参加され、八九歳の人生の大先輩も毎回欠かさず通学なさいます。最初は、多くても二十名の受講生を考えていたのですが、フタを開けたら三十五名でした。皆さんとても御熱心です。

古文書といえば難解なもの、という世間一般の風評を破って、歴史の生きた証明書を知ることが目的です。古文書なんか読めなくてもいい、他と区別するには、各文書それぞれに何処に注目すればいいかという、一種のナゾ解きみたいなことをやって、いま現在京都にのこっている古文書について、できるだけ多くの種類を知ろうという講座です。テキストは毎回、有名な古文書の写真を、なるべく原寸に近くコピーして、古文書の「顔」をおぼえるようにしています。そんなわけで、最近は博物館学芸員志望の学生が、一回生から五人も受講しています。

御父母の皆さま!!

いかがですか、歓迎いたします。

（人文学部教授）

ツアリズム・スタディーズ 訪欧記

ドッツァ城内から鐘楼を見る

このたび、T・S研究会からの派遣取材で、北イタリアを巡回してきました。

今回の聞き取り調査もするために、西山際子さん（フィレンツェのアカデミア卒・現地で版画の勉強中）の協力を得られることになり、レンタカーを駆って、ボローニャを振出に、ドッツァ、トレント、ボルツァーノ、メラーノ、ナテュール、マレス、テューブレ、それからスイスのエンガディン渓谷をぬけて、再びイタリアのアルクメッジァからミラーノまでの約一〇〇〇kmを古い壁絵、新しい壁絵を探し訪ねてきました。

マレス付近の沈める寺

この辺りの国境は複雑に入りこんでいる所があり、一日に五回もパスポートの検査をうける日もありました。

日本でも最近になって、あちこちに壁絵が見られるようになって来ましたが、ヨーロッパでの起源は遠く三〇〇〇年の昔から描かれており、また、村興し、町興しの手段として、観光客誘致政策として、4半世紀前から、自治体などが中心となって人家の壁面に絵を描くことが各地で行われています。

この事業アイディアの実現を最初に行ったのが、終わりに訪れたアルクメッジァとのこと。

詳しい日時などは、未定ですが、オリジナルの戯曲でおもしろいものにしようと今から構想をねっていますので、足をお運び下さい。

それでは、会場でお会いしましょう。

アルクメッジァ製作中のファイーニ氏と助手

一九五六年に初めて実施された時の制作者は応募制だったのが、三回目からは指名制の実力画家による制作方法になったそうです。当地の事は早くから知ってはいたのですが、交通不便なところなので、訪問は後回しになっていました。しかし、今回はレンタカーによる、運転手兼通訳付でやっと行くことができました。

朝方アルクメッジァを訪れると、願ってもないことに、ミラーノ在住の実力画家、ウンベルト・ファイーニ氏が、この村唯一のホテルのある広場に面する一軒の家にちょうど壁絵を制作中でした。

制作台上にあがって、氏から壁絵制作の技法を詳細に話してもらいました。

まず、壁面に下地を丹念に塗りこみ、それが乾燥しないうちに上塗りや彩色を行い、それを削り取ったり、またその上に色を塗り重ねたりしながら描く、フレスコとグラッフィートによるミックス技法とのこと。

滞在をのばした二日間は瞬く間に過ぎて、ファイーニ氏は完成間近い壁絵を、横から透かして眺めたり、離れて見たりしながら、二人の助手にあれこれ指図していましたが、昼近くなってやっと「フィニート（終わりの意）」と大声を発して、描き上がりました。そして、その壁絵の室内で、祝賀パーティーが始まり、私まで祝酒のお相伴にあずかったり、記念撮影をしたりして完成を祝いました。

村興しのためにこんな小さな所でも大きな文化的事業を住民全体が協力しあって遂行しているさまをつぶさに見ることができ、意義深い取材の旅となりました。

歓迎された村の観光所長から、残り僅少の記録写真集やB3版の壁絵ポスターなどをもらい、二〇km離れたルガーノまで見送りを受けてアルクメッジァを後にしました。

（美術学部教授　松味利郎）

クラブ紹介
劇的集団 忘却曲線

◆「平安建都・京都まつり」に参加「本公演」も演ります◆

私達「演劇部」は今年から名称を『劇的集団　忘却曲線』と決定し、新たな気持ちで活動しています。現在の形態になってからはまだ半年と少しですが「誰かのマネではなく自分達にしか出来ないオモシロイコトを」と創作練習にはげむ毎日です。

現在部員数は33名。うち28名が人文学部ということで、美術学部の人が少ないのが悩みのタネですが、学部に関らず、それぞれが自分の得意なことやってみたいことなどを持ち寄って、芝居づくりを進めています。当面はオリジナルの戯曲を中心に、まず自分達が、おもしろいと感じることや新しい試みなどを盛り込んで、見た人の心に何かしら忘れられないものの残る舞台作りを目指していきたいと思っています。

前回公演の「カタレプシィ～かくも長き記憶の不在」では会場となったセミナーA館の3Fを鉄格子で囲み、ビニール製の血管を張りめぐらせたり、薬箱に見立てたパンフレットを配るなど、舞台の上だけに限らない舞台作りが好評を得ました。

これからの課題としては、役者の技術の向上があげられます。発声、滑舌、体の動きなどの基礎をきちんと身につけ、更にグレードの高い舞台を創造していきたいと思っています。

次回公演の予定は、まず11月6日に平安建都一二〇〇年記念「京都まつり」のイベントに出演が決まっています。また11月末には本公演を打つ予定です。

教職員研究活動（1993.9～1994.8）

◆**伊奈新祐**（美術学部助教授）
＊第五回国際ビデオウィーク 1993.10～11（スイス、ジュネーブ）
＊第二回 KINO-VISION ビデオテーク・プロデュース 1993.12 鳥丸ホール（京都）
＊イメージフォーラム・フェスティバル一九九三・アンコール上映会 1994.1 イメージフォーラム（東京）
＊ベルリン国際映画祭ビデオ部門 VideoFest'94 1994.2（ドイツ）

◆**江口英子**（人文学部講師）
「共同作業としての経験学習を目指して―一九九二年度英語授業報告―」1994.2 京都橘女子大学外国語教育研究センター紀要第二号

◆**遠藤育枝**（人文学部助教授）
＊『ちびすけペンギンものがたり』オードリー・ウッド作絵（単訳）1994.1 ブックローン出版
＊「寛ぎの世界―アーノルド・ローベル」1994.2 飛ぶ教室四九号

◆**小川　了**（人文学部教授）
＊書評『サバンナの王国―ある"作られた伝統"のドキュメント』川田順造著 リブロポート『アフリカ研究』第四三号 1993.9.
＊翻訳監修「カナリア諸島の洞窟民」『インターナショナル　ゲオマガジン』第一巻六号 1994.6.
＊「水になったヤシ酒」『月刊みんぱく』一九九三・九月号 1993.9.5
＊「恩を忘れると一大事」『月刊みんぱく』一九九三・十月号 1993.10.5
＊「グリーン・サヘル国際フォーラム報告書」コーディネーター　小川　了 1993.10.10
＊「ゾウに恋した若者」『月刊みんぱく』一九九三・十一月号 1993.11.5
＊「売られた母親」『月刊みんぱく』一九九三・十二月号 1993.12.5
＊「ウサギのサンジュウ」『月刊みんぱく』一九九四・一月号 1994.1.5
＊「天使の預言」『月刊みんぱく』一九九四・二月号 1994.2.5
＊「三つの教え」『月刊みんぱく』一九九四・三月号 1994.3.5

◆**呉　宗明**（人文学部教授）
＊「日本統治下台湾における書房と公学校―一八九五年から一九一八年までを中心に―」（阿部洋編『戦前日本の植民地教育政策に関する総合研究』1994.3）（共著）
＊「近代日本の台湾認識―『台湾協会会報』・『東洋時報』を中心に―」（土肥哲夫編『近代日本のアジア認識』京都大学人文科学研究所1994.3）（共著）

◆**柴谷篤弘**（学長）
＊「Stability of arbitrary structures: its implications for heredity and evolution. Part II」（単著）1993. 『Biology Forum』八六巻二号
＊「文字が差別を助長するか」（単著）1993.11 『ことばる』八号
＊「蝶類保護　国際的及び外国の事例」（単著）1994.1 『日本産蝶類の衰亡と保護』第一集
＊「『いのち』を問う科学批判」（単著）1994.1 『同朋』四五巻一号
＊「さかさ差別の試み（八下）」（単著）1994.1 『むすび』五号
＊「The genus Maculinea van Eecke, 1915 (Lepidoptera: Lycaenidae) from the East Palaearctic Region」（共著）1994.2 『蝶と蛾』四四巻四号
＊「科学技術の変貌と社会」（単著）1994.3 オーストラリア雇用教育訓練省編『すばらしきオーストラリア教育』ダイアモンド社

◆**末石富太郎**（人文学部教授）
＊『東北アジアの新しい秩序について―Ⅲ自然環境』（共著）1993.9 晩聲社
＊「都市は蘇生できるか―パニック型破局から相転位型更正へ」（単著）1993.9 『CEL』二五号
＊「リスク学の範囲（安全と危険）」（単著）1993.9 『日本リスク研究学会誌』五巻一号
＊「リサイクルの場としての『市民ラボ』の創造にむけて」（共著）1993.10 『第四回廃棄物学会研究発表会講演論文集』
＊「主婦と主夫とバッド・ハズバンドリー」（単著）1993.10 福田喜弓編『「主人」ということば―女からみた男の呼び方』明石書店
＊「資源循環社会システムの社会実験」（単著）1993.11 『土木学会環境システム委員会第三回地域シンポジウム講演論文集』
＊「生産者のC1型発信情報に関する写真KJ法の展開」（共著）1993.11 『第一七回KJ法学会論文集』
＊「告知されるガン患者　地球」（単著）1994.3.
＊「吹田の市民研究員制度」（単著）1994.3. 『環境安全』六〇号
＊「文明社会の野蛮人・文化社会の環境人」（単著）1994.3 『家庭経営学研究』二九号
＊「現代都市文明における環境「リサイクル」の要求性」（単著）1994.3 『△第一回▽日中韓・東北アジア専門家による環境「リサイクル」国際シンポジウム報告・論文集』

◆**田中充子**（美術学部講師）
＊『PROCESS: Architecture　二〇ポラ　建築博物館の街』（単著）1994.2 プロセスアーキテクチュア
＊『The Electric Geisha』（上田篤編共著）1994.2 KODANSHA INTERNATIONAL
＊「一九世紀以前の建築様式の変遷を通してみたブラハの成立と展開」1994.1 京都精華大学紀要第六号
＊壁画制作「月」1994.1 関西学術研究都市国際交流センター
＊装飾都市プラハ（写真展）1994.4 堺市博物館

◆**千阪靖朗**（人文学部教授）
＊「ダキアのポエティウスの『世界の永遠性について』―二度真理の問題―同志社哲学年報第十六号、同志社哲学会編 1993.9
＊「ボナヴェントゥラにおける罪の概念―『背反』と『転回』―」京都精華大紀要第六号 1994.1

◆**中島勝佳**（人文学部助教授）
＊「大学開放の現状」（単）『京都精華大学紀要』六号 1994.1
＊「一九九三年度部落生活文化史調査研究中間報告書」（共）反差別国際連帯解放研究所しが 1994.3
＊「リベラリズムの苦悩・進歩への苦悩をなぜつなぐか」（単）『木野評論』二五号 1994.3
＊「大学の『自治』と『自律』」（単）『木野評論』二五号 1994.3

◆**橋本初子**（人文学部教授）
＊『根来茶書』（単著 平成六年二月 東京美術）
＊「三宝院覆後僧正日記―文和四年―」（単著 平成五年十二月 醍醐寺文化財研究所『研究紀要』十二号）
＊「歴史を語る案文（当山修験機関紙 神変社発行平成五年八月『神變』九七七号）
＊「法会所用具の文書」（同 平成五年九月 九七八号）
＊「法会役割の文書」（同 平成五年十月 九七九号）
＊「法会の請定」（同 平成五年十一月 九八〇号）
＊「加行の文書」（同 平成五年十二月 九八一号）
＊「公家の筆跡」（同 平成六年一月 九八二号）
＊「先例書抜き文書」（同 平成六年二月 九八三号）
＊「寺僧の書状」（同 平成六年三月 九八四号）

◆**橋爪紳也**（人文学部講師）
＊『KANSAIニューウェストの台頭』（財団法人あまがさき未来協会編、米山俊直他との共著）1993.12 関西書院
＊「大阪湾ベイエリア―21世紀を語る」『BARD』第七号（対談）1994.1
財団法人大阪湾ベイエリア開発推進機構
＊「『大阪の近代建築と保存活用』を巡って『まちなみ』（対談）1994.1 大阪建築士事務所協会
＊「倶楽部と日本人―自由時間社会における交流空間をめぐって」『93 Annual Report 大阪体育大学スポーツ産業特別講座』1994.3
＊「魅力あるまちづくりのための視点」『都市研究・京都』第八号 1994.3 京都市企画調整局活性化推進室
＊「にぎわいを創る」『ANEMOS』1994.1～連載中 長谷コーポレーション総合研究所
＊「メトロポリタン・ライブラリー」『SD』1991.3～連載中」鹿島出版会
＊「平成流行リモノ・クロスレビュー」『アクロス』一九九三・四～九四・三連載

◆**松野凜子**（美術学部　教授）
＊『資料日本ウーマン・リブ史』第二巻（松香堂）1994.1.25・共著
＊「シカゴのアフリカン・メソジスト・エピスコパル教会」京都精華大学紀要第六号 1994.1.31・単著
＊「人種差別と女性差別にたいして闘うスイート・ハニィ・イン・ザ・ロックの歌」京都精華大学紀要第六号 1994.1.31・単著
＊「ウーマンリブを継承する『歴史』を」『Fifty: Fifty』一四号1994.5.15・単著

（6ページに続きます）

◆松本ヒデオ（美術学部講師）
＊「新しき融合」日韓現代造形作家交流展 1993・9/13～9/18 大阪府立現代美術センター
＊同 9/20～9/28 スタジオCOM（京都）
＊同 9/30～10/24 伊丹市立工芸センター
＊陶「掌中のかたち展」1993・10/8～10/20 ギャラリー器館（京都）
＊同 10/29～11/10 近鉄阿倍野クリエイターズ
＊「新しきかたち二人展」（松本ヒデオ、三橋遵）1993・10/23～11/16 ギャラリー正観堂（京都）
＊現代造形作家交流展 1993・10/27～11/25 画廊彩博（尼崎）
＊個展 1993・11/24～12/4 ギャルリ・プス（東京）
＊ETO－TEN・戌 1993・12/3～12/6 京阪守口アート・サロン（大阪）
＊現代作家立体小品展・壁Ⅷ 1994・2/7～2/19 ワコール銀座アートスペース（東京）
＊同 2/22～3/6 ギャラリー・マロニエ（京都）
＊個展 1994・3/17～3/24 赤坂乾ギャラリー（東京）
＊「TERRAFORMS」Contemporary Japanese Ceramic 1994・3/17～6/3 グアム大学イスラ美術センター

◆丸谷 彰
エディトリアル・デザイン
＊パンセ選書の計画「胎児のまなざし」1993・10 「社会同和教育読本」1994・2
＊「アジアからみるアジアをみる」1994・3
＊「近代に生きるひとびと」1994・3
以上 阿呼社

人文学研究科 京都精華大学 1995 年度入試日程 美術研究科

人文学研究科（修士課程）募集人員

前期 約5名	後期 約5名

研究科	出願期間	試験日	合格発表	手続締切
（人文）前期日程	1994年9月12日(月)～9月22日(木)	1994年 10月1日(土) 2日(日)	1994年 10月7日(金)	1994年 10月14日(金)
（人文）後期日程	1995年2月6日(月)～2月17日(金)	1995年 2月25日(土) 26日(日)	1995年 3月3日(金)	1995年 3月10日(金)

美術研究科（修士課程）募集人員

造形専攻 10名	デザイン専攻 10名
洋画分野	視覚伝達デザイン分野
日本画分野	染織分野
立体造形分野	風刺画分野
版画分野	建築分野
陶芸分野	

出願期間	試験日	合格発表	手続締切
1994年11月8日(火)～11月18日(金)	1994年 12月10日(土)	1994年 12月20日(火)	1994年 12月20日(火)

95
京都精華大学
大学院 美術研究科 人文学研究科

入試改革の意味

入試広報課

日本のほとんどの大学・短期大学には入試課、また入試広報課といった入試を担当する部署がありますが、現在これら入試に関わる人たちの多くが共通して頭を悩ませていることがあります。

昨年九月、文部省の大学審議会が「大学入試の改善に関する審議のまとめ」という報告を提出し、それによりかなりな数の大学が、現在の入試制度を一九九六年度入試から変更しなければならないという事態になりました。報告の内容は多岐にわたりますが、ここでは私たちにとって最大の難問である推薦入試に関する点を以下に記します。

①『学力検査の免除について、その徹底をはかる』（面接・小論文はよいが学科試験はダメということ）

②『受付け開始を二学期半ばの十一月以降とする』

③『入学定員に占める推薦入学者の割合は、三割を越えないこと』

このうち京都精華大学の入試で問題になるのは①と③で、人文学部で英語の試験を実施していること、推薦の募集定員が人文で全体の五二%、美術で六〇%であり三割を大幅に超過していることです。

①については一九九五年度の入試に小論文を取り入れ、段階的に学科試験をなくしていく方向に向かっていますが、受験生の高校での成績や能力を評価できる入試制度を考案し、さらに設けなければなりません。

③については、単純に推薦の定員を三割に設定すればよいわけではなく、いくつかクリアすべき問題があります。現在の京都精華大学の志願者数は推薦入試が一般入試を上回っており、募集定員を変更すれば従来の志願者数を確保することが難しくなると予想されます。とくに人文学部では合格発表者数の変化による偏差値の変動が以後の募集状況に大きな影響を及ぼすはずです。

また大学審議会の報告は、『教育理念や目的を明確にした上で、求める学生像を明らかにする必要がある』と基本方針のなかで明言しています。この言葉は、いまの京都精華大学にとって大きな意味を持っています。外から迫られて行う入試改革といった格好になっていますが、入試のあり様は大学の個性の具現ですから、今回の入試改革はこれからの大学の方向を考えるよい機会だと言えるでしょう。私たちの大学はこうだ、と胸を張って外に発信できる入試制度にしたいものです。

◆◆◆

『同窓会 木野会'94』

◆第7回木野会総会
日時 94年11月3日(木)
総会 2時より明窓会にて
懇親会 5時より本館にて

◆◆◆

日本とモンゴルの交流を願って

京都市国際交流会館で日本で初めてのモンゴル文字書道展が開かれました。外モンゴルで今年、モンゴル文字が復活したことを記念したものですが、京都精華大学留学生スーチンドロン君を中心とする「ねーじ」が企画しました。この間、新聞紙上では、度々話題になりました。本学関係の方々にもご協力をいただき大成功をおさめて、スーチンドロン君より感謝のことばが大学にも届いています。

1994・7・14(木)～7・20(水)・土日は休み

モンゴル文字 書展

出展者 アイリンチョロ・オットンゴワ・敖登高娃・吉格吉德・宝山・那普太

内モンゴル在住書家による蒙古族のこころ

モンゴル文化交流サークル "ねーじ"
アジア・サロン実行委員会